

The Definition of a Peaceable Revolution



非暴力抵抗を訴えたナチュラリスト

ヘンリー・デイヴィッド・ソローへ 手紙を書こう

19世紀中頃のアメリカに、文明社会に背を向け、
ただ一人暮の中で生活を始めた若者がいた。

アウトドア・ライフ、エコロジー思想の先駆者—ヘンリー・デイヴィッド・ソロー。

彼ならではの生き方から生まれた、不正な戦争や奴隷制に対する「非暴力抵抗」の思想は
ガンジーやキング牧師にも多大なる影響を与えた。

時代を先取りした偉大なナチュラリストであり民主主義者であった
ソローの訴えに、耳を傾けてみよう。



1 手紙形式のエッセイ募集

ヘンリー・デイヴィッド・ソローの主張を理解して、あなたが考えたこと、思ったこと、
感じたことを、ソローへのあなたからの手紙という形式で、自由に書いてみてください。

2 応募資格

高校生(学年や性別を問いません)

3 応募要領

日本語の場合は、400字詰原稿用紙3枚(縦書き1200字)程度。英語の場合は、
400words程度(A4利用紙)。(鉛筆の場合は、HB又はBを使用)※別紙に、氏名
(フリガナ)・性別・高校名(所在県名)・学年・自宅住所(郵便番号も記入)・電話
番号を記入して原稿に添付し、郵送してください。

4 募集期間

2004年7月1日(木)～9月3日(金)(当日消印有効)

5 賞金等

最優秀賞1名(賞金5万円を贈呈、10月3日(日)津田塾大学において表彰します。)
優秀賞若干名(賞金1万円を贈呈)。最優秀作品は津田塾大学広報紙「Tsuda Today」
と津田塾大学ホームページに、優秀作品は津田塾大学ホームページに掲載・公表
します。応募作品は返却しません。応募作品の著作権は主催者に帰属します。

6 入選発表

9月30日(木)までに、入選者本人に通知します。

7 提出先・問い合わせ先

〒187-8577 東京都小平市津田町2-1-1 津田塾大学「高校生エッセイ・コンテスト
係」TEL:042-342-5113 E-MAIL:essaycon@tsuda.ac.jp

<http://www.tsuda.ac.jp>

津田塾大学ホームページで、第1回～4回の高校生エッセイ・コンテスト選考
結果等を掲載しています。どうぞご覧ください。

ヘンリー・デイヴィッド・ソローの主張を理解して、あなたが考えたこと、思ったこと、感じたことを、ソローへのあなたからの手紙という形式で、自由に書いてみてください。



1845年7月、ソローはコンコード郊外のウォールデン池のほとりに自ら小屋を建て、自給自足の生活を始めた。文明社会に生きる人々が土地や財産に縛り付けられて、本当の自由を失っている姿に疑問を感じた彼は、余計なものをすべて捨て去り、ぎりぎりの質素な生活を、この後2年あまりにわたって、ニューイングランドの大自然の中で送ることになる。当時のアメリカはすでに消費社会の様相を見せはじめていたが、ソローはそんな文明社会にきっぱりと背を向け、自然との豊かな交流の中で、精神の自由を心から満喫することが出来たのである。この時の森での生活を克明に綴った『森の生活—ウォールデン』(Walden, or Life in the Woods, 1854)は、時を超えて1960年代、反文明の思想に傾倒した若者たちのバイブルになった。

I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived. I did not wish to live what was not life, living is so dear; nor did I wish to practise resignation, unless it was quite necessary. (Walden, or Life in the Woods より)

1846年7月、森の生活をはじめて一年後、ソローはメキシコ戦争と奴隷制に反対して、人頭税を払うことを拒否したために投獄された。代わりに払った者(おそらくソローのおば)がいたため、わずか一晩で解放されたが、この経験から生まれたのが「市民の反抗」(“Resistance to Civil Government,” 1849)である。

I heartily accept the motto,—“That government is best which governs least;” and I should like to see it acted up to more rapidly and systematically. Carried out, it finally amounts to this, which also I believe,—“That government is best which governs not at all;” and when men are prepared for it, that will be the kind of government which they will have. (“Resistance to Civil Government” より)

という書き出しでこの文章は始まる。ソローは政府そのものを否定しているわけではない。しかし、彼の考えによると、政府とはあくまでも便宜のためにあるものにすぎず、そのために国民が不便をこうむるのは、本来の目的に反することである。理想的な政府の下では、「国民は少しも政府の干渉など受けないものである」。また、多数者であってもつねに正しいことを行うとはかぎらないので、多数者が権力を持つのもよくない。正邪を決定すべきは良心であって、多数者は便宜的な問題だけ決定すればよいのである。そして、ソローが自らに課す唯一の義務とは、「いかなる時でも自分が正しいと考えることを行う」ことである。

Henry David Thoreau

精神の自由を愛したソローは他人の自由を護ることに全力で取り組んだ。19世紀前半のアメリカは西部開拓が進み、民主主義が大きく発展した時期だった。ところがその一方で、南部では非人間的な奴隷制度が続き、また領土拡張を目指して他国を侵略するという矛盾も抱えていた。

このようなアメリカ政府に対して、人はどのようにふるまったらいいのか。革命権、すなわち、政府のはなはだしい暴虐と無能に対し、国民が抵抗する権利を認めない人はいないが、ほとんどの人は、今はそういう場合ではないと言う。しかし、ソローにはそうは思えなかった。

In other words, when a sixth of the population of a nation which has undertaken to be the refuge of liberty are slaves, and a whole country is unjustly overrun and conquered by a foreign army, and subjected to military law, I think that it is not too soon for honest men to rebel and revolutionize. What makes this duty the more urgent is the fact, that the country so overrun is not our own, but ours is the invading army. (“Resistance to Civil Government” より)

このように、民主主義のもっとも発達したアメリカで、ソローは市民と政府に対しきびしい真摯な疑問を正面から投げかける。

If the alternative is to keep all just men in prison, or give up war and slavery, the State will not hesitate which to choose. If a thousand men were not to pay their tax-bills this year, that would not be a violent and bloody measure, as it would be to pay them, and enable the State to commit violence and shed innocent blood. This is, in fact, the definition of a peaceable revolution, if any such is possible. (“Resistance to Civil Government” より)

ウォールデンの森でのソローの生活は、今日のアウトドア・ライフ、スロー・ライフの先駆けであり、19世紀中頃の時点でソローはすでに現代文明の未来を予言し、新しい生き方を提示していたのである。彼の生き方は今日のエコロジー思想の原点でもある。さらに、平和革命の可能性と税の不払い運動という実際的方法を示すことで、ソローは非暴力抵抗運動の原点となり、後世に大きな影響を与えることになったのである。

Henry David Thoreau

(1817-1862)



アメリカが生んだ最良の個人主義者ともいうべきソローは、何よりも精神の自由を愛する人でした。

ソローは、1817年、ボストン近くの町コンコードに生まれました。ハーバード大学在学中に、「自然論」を著書にもつ思想家エマソンの講演に感動し、エマソンに傾倒するようになります。束縛を嫌った彼は、大学卒業後も定職に就くことなく、土地の測量の仕事をしたり、家業の鉛筆製造を手伝ったりして過ごしました。

28歳の時、コンコードの郊外の森の中、ウォールデン池のほとりに小屋を建て、自給自足の質素な生活に入りました。この時期、アメリカでは急速な産業化が進み、鉄道建設や土地開発などのために森林は乱伐され、物質主義がはびこり始めました。そうした風潮に背を向け、ソローは生活をできるだけ単純なものとし、自然観察を通して「本当の生活」を追い求めたのです。この2年2ヶ月の体験を通して、人生のあるべき姿、自然とともに生きることを意味を語ったのが、著書「森の生活-ウォールデン」です。

ウォールデンの森で生活していた1846年7月、ソローは、奴隷制度およびメキシコ戦争に反対し、アメリカ合衆国に人頭税の支払いを拒否しました。これによりソローは投獄されるのですが、「市民の反抗」は、その時の彼の思想を述べた講演の記録です。そのなかでソローは、政府とは必要で「役に立つもの」だが、もし政府が個人の自由を侵害する時には、誠実な市民は国家に反抗すべきであると主張しました。そしてその方法として、彼は税金の不払いという道を選んだのです。みんなが税金の不払いを実行すれば、政府は方針を転換せざるをえず、非暴力による平和革命が達成できると、ソローは力強く訴えています。この思想は、20世紀へと受け継がれ、インドの独立革命におけるガンジーの非暴力思想、そして1950、60年代のアメリカの公民権運動におけるマーティン・ルーサー・キング牧師の非暴力主義に決定的な影響を与えることになりました。

ソローは、森での生活を通して、自らの精神の自由を求めただけでなく、すべての人々の自由を訴え続けました。彼の熱のこもった言葉は、今なお、多くの人々に深い感銘を与えています。

参考書籍

- H.D.ソロー「市民の反抗—他五編」飯田実訳 岩波文庫 1997年
- H.D.ソロー「森の生活—ウォールデン」全2巻 飯田実訳 岩波文庫 1995年
- ヘンリー・S・ソルト「ヘンリー・ソローの暮らし」山口晃訳 風行社 2001年
- 伊藤詔子「よみがえるソロー—ネイチャーライティングとアメリカ社会」 柏書房 1998年
- フィリップ・ヴァン・ドーレン・スターン「ヘンリー・ディヴィッド・ソーロー—ある反骨作家の生涯」 上岡克己訳 開文社出版 1989年
- Thoreau, Henry D. "Walden" and "Resistance to Civil Government." 2nd. ed. Ed. William Rossi. New York: Norton, 1966.